

韓国語単文理解における主題助詞と主格助詞 の動作主性とその発達

——日本語の助詞ハとガとの比較——

田原俊司* 朴媛淑** 伊藤武彦***

AGENTIVITY AND ITS DEVELOPMENT OF THE KOREAN TOPIC MARKER AND THE NOMINATIVE MARKER IN COMPREHENSION OF KOREAN SIMPLE SENTENCES

—A comparison with the Japanese topic marker WA and the nominative marker GA—

Shunji TAHARA Wonsook PARK AND Takehiko ITO

Korean is a language that have both postpositional particles of topic marker(-eun/neun) and nominative marker(-i/ga). The purpose of this study was to examine the acquisition of these particles in view of agentivity. We defined agentivity of a particle as the probability in which a noun phrase with the particle is processed as the agent of a sentence. Eighty Korean native speakers of 4, 5, 6, 8, 10, 12, 14 years old and adults were instructed to listen to simple noun-noun-verb sentences and to judge which noun was the agent by acting out the sentences using miniature animals and objects. Stimulus sentences consisted of 18 sentence types composed of particle (3) × word order (2) × noun animacy (3) combinations. The results showed that the agentivity of the nominative marker was higher than that of the topic marker in the adult's responses and it was at twelve years old when the level of agentivity came up to an adult's level. This tendency was quite similar to the way of the processing of Japanese particles: topic "-wa" and nominative "-ga".

Key words: language development, Korean, sentence comprehension, grammar, topic and subject.

日本語を母語とする成人にとって、言語運用上、助詞ハとガの使い分けはさほど困難ではない。しかし、外国人日本語学習者にとって、この使い分けは非常に困難であり、誤用の多い文法項目であることが指摘されている（例えば鈴木、1978）。ところが、助詞ハとガの習得に困難をきたすことの多い外国人日本語学習者の中にあって、朝鮮語（以下韓国語と表記）を母語とする者は日本語の助

詞ハとガの使い分けを容易に学習することが日本語教育界で知られている。これは韓国語が SOV 言語（基本語順が主語—目的語—動詞の言語）であり、後置詞言語（名詞の後に助詞が付く）であるのみならず、主題をあらわす助詞 -eun/neun と主格をあらわす助詞 -i/ga が存在し、日本語のハとガに対応した用法を持っているためであると考えられる。韓国語の主題と主格それぞれの助詞の対は、名詞句が母音で終わるか子音で終わるかで使い分けられる。すなわち、名詞句が子音で終われば主題の場合 -eun（ウンと発音）、主格では -i（イと発音）、名詞句が母音で終われば主題の場合 -neun（ヌンと発音）、主格では -ga（ガと発音）が用いられる。例えば、NAN（蘭）は子音Nで終わるので主題の場合 -eun、主格では -i、SO

* 東京大学教育学研究科 (Department of Educational Psychology, University of Tokyo)

** 東京大学教育学研究科 (Department of School Education, University of Tokyo)

*** 和光大学人文学部人間関係学科 (Department of Humna Science, Wako University)

(牛)は母音Oで終わるので主題の場合 -neun, 主格の場合 -ga で受ける。Li and Thompson (1976) は、日本語と韓国語は主題と主格の両標識を併せ持つ言語として、世界の言語の中で同じグループに分類している。また、韓国語言語学でも、日本語と韓国語の助詞の主題と主格の用法の共通性が指摘されている (洪, 1983)。

日本語において主題へと主格ガの用法上の区別は、心理言語学的に動作主性という観点から研究がなされている。ここで動作主性とは、伊藤 (1982) によれば「能動文中で、その助詞の名詞句が動作主として選択される蓋然性」である。Ito (in press) は、日本語を母語とする成人話者に2つの名詞句と他動詞からなる単文を聞かせ、一方の名詞句にハまたはガが付いた場合と両方の名詞句に各々ハとガが付いている場合のそれぞれで、ガの付いた名詞句が他動詞の動作の主体(動作主)として選択される率がハのそれよりも高いこと、ハよりもガの動作主性が高くなるのは、ガが他動詞文で主格をあらわす格助詞であるのに対してハは主題提示の助詞であり格関係をあらわす機能を備えていないこと、しかし、実際の言語運用では動作主にあたる名詞句は主題化されることが多いことから、ハは文法的には格関係を示さないが言語使用経験に基づいた経験的・心理的機能として聞き手に動作主であると解釈させる力があることを明らかにした。韓国人成人母語話者が -eun/neun と -i/ga の付いた名詞句を動作主として判断する場合、日本語と同じような現象が見られるかどうか調べることは興味深い。

ところで、日本語を母語とする者でも、この助詞ハとガの獲得はかなり遅いことが明らかにされている (近藤, 1978; 秦野, 1979; Miyazaki, 1979; 林部, 1983; 田原・伊藤, 1985; 岩立, 1986)。伊藤・田原 (1986) は日本人母語話者において、ハの動作主性とガのそれが年齢とともにどのように変化するか調査し、ハとガの動作主性が語順によらず成人の水準に達するのは10歳以降であるということを明らかにした。韓国語において日本語のハとガと同様の発達の傾向があるかどうかについては、これまで調査がなされていない。

本研究は、伊藤・田原 (1986) の実験と同一の方法を韓国人の被験者に対して韓国語を用いることによって、以下の問題を明らかにすることにある。第1に、Li and Thompson (1976) が日本語と同じグループに分類した韓国語において -eun/neun と -i/ga の動作主性の高さをそれぞれ調べ、両者を比較する。第2に、このような助詞による動作主選択がいつ頃、獲得されるのかを明らかにする。第3に、助詞という文法的手がかり以外に、どのような手がかりを用いて動作主を決定しているか

(どのような文理解の方略を使用するか)を明らかにする。第4に、以上の3点を日本語 (伊藤・田原, 1986) と比較し、両言語の特徴を明らかにする。本研究は、韓国語の母語の教育および (日本人を含む) 外国人向けの韓国語教育の基礎資料になるのみならず、韓国語と日本語を比較することにより日本語教育・国語教育へも示唆を与えるものとなろう。

方 法

被験者 韓国語を母語とするソウル及びソウル近郊の4, 5, 6, 8, 10, 12, 14歳、大学生の8群で、各群10名(男5名, 女5名), 計80名。実験は1986年3月にソウルで実施され、実験時の各群の平均年齢は、それぞれ4歳9か月, 5歳6か月, 6歳8か月, 8歳7か月, 10歳9か月, 12歳6か月, 14歳7か月, 20歳5か月であった。

実験材料 刺激文を録音したカセットテープ, ミニチュアの動物と小物, テープレコーダー, A4の白紙, 記録用紙。刺激文は TABLE 1 に示すように2つの名詞(N)と動詞(V)からなる $N_1 + N_2 + V$ 型の文 (N_1 と N_2 は文中における名詞の位置で、文頭の名詞〔第1名詞〕を N_1 、動詞の直前の名詞〔第2名詞〕を N_2 とする)で、助詞の種類(3通り)×語順(2通り)×意味(3通り)により構成された18文型である。ここで助詞の種類とは刺激文中に主格助詞 -i/ga (以下S)のみを用いたもの、主題助詞 -eun/neun (以下T)のみを用いたもの、TとSの両助詞を用いたもの3通り、語順とは助詞を N_1 と N_2 のどちらに後置させるかで、S (ただしTのみを用いる文ではT)を N_1 に後置させる場合と N_2 に後置させる場合の2通り、意味とは N_1 , N_2 の名詞が生物(A)か無生物(I)かで、両名詞が生物(AA), N_1 が生物で N_2 が無生物(AI), N_1 が無生物で N_2 が生物(IA)の3通りである。この18の文型に対して、魚, 鹿, 犬, 亀, らくだ, 馬の生物名詞6種, 箱, 鉛筆, スプーン, ボール, クレヨン, ケシゴムの無生物名詞6種, 「触った」「押した」「叩いた」「噛んだ」の動詞4種の中から無作意にA, I, Vを選び出し (ただしAAV型の文では、Aは同一の生物名詞とならないようにする), 各文型に対して1文ずつ, 合計18の文を作成しテープに録音する。名詞の選択基準は、生物名詞は子どもにとってなじみのある脊椎動物, 無生物名詞は日常的に見なれたものを選び、いずれの単語も4歳ですでに獲得済みであろうと思われるものとした。動詞の選択基準は、(1)子どもにとって理解が容易で、かつ(2)一方が他方に対して行う動作が観察しやすい他動詞とした。以上の方法により構成された刺激文の一部は、日常生活では聞かれることのない人工的な文となる。しかし、す

で述べたように本研究は助詞の種類と語順、意味の3要因の中で、韓国語母語話者がどの手がかりに基づいて文を理解するかを発達的に明らかにすることを目的にしている。本研究で用いた方法を採用することにより、第1に、上述の各要因の主効果と交互作用を数量的に明らかにすることができ、第2に、伊藤・田原(1986)の日本語の研究と同一の方法を用いることで、韓国語と日本語の直接の比較が可能になる。

録音のスピードは各文を3秒で読み、読み終えて約7秒の間をとって次の文を読みはじめた。18文の録音の順番はランダムである。1本のテープは以上のように18の文型で各文型1文ずつの18文とし、同様の方法で4本のテープを作成する。また、「犬ガ亀 叩いた」「鹿ハ馬 噛んだ」「らくだガ魚 押した」「鹿ハらくだ 触った」の4文を録音したテープを練習文として作成した。ミニチュアや小物は、練習文、刺激文中の生物、無生物名詞を型どったもので、各名詞1つずつ計12個である。

手続 A4の白紙の上にランダムに置かれた12個のミニチュア、小物を命名することができるかどうか確認した後、「今からテープレコーダーから、短いお話(小学校1年以降は「文」)が聞こえてきます。そのお話(文)をよく聞いて、目の前にあるものを使って、その通りにやってみせて下さい。そのとき、両手を使わないで、片手でやってみせてください。」という指示を与え、練習文の

テープを聞かせる。片手で実演するように教示したのは、両手を使って2つのものを持つと動作主の判断が困難になるからである。また、お話(文)を聞き落としたときには何度でもテープを聞くことができることも告げておく。練習文で実演することができたら、ミニチュア・小物の位置を変えて、4本のテープのうちの1本を無作意に選び出し、実演させる。終了後、2, 3分の休憩の後に、残った3本のテープのうちの1本を無作意に選び、同様の手続で実演させる。なお、実験は本論文の著者の1人である韓国語母語話者が実験者となることにより、すべて韓国語で行われた。

結 果

分析方法 各被験者について、18文型ごとに正答率を算出する。本研究の定義では、TABLE 1にいう、S ϕ 文、 ϕ S文、TS文、ST文の4文型ではSの付いた名詞を動作主として選択したものを正答とし、T ϕ 文と ϕ T文の2文型に対してはTの付いた名詞を動作主として選択したものを正答とする。この正答の定義に従えば、S ϕ 文、 ϕ S文それぞれの正答率はS単独の動作主性を、T ϕ 文、 ϕ T文それぞれの正答率はT単独の動作主性を、また、ST文、TS文における正答率はTの動作主性に競合・対立したSの動作主性を示す。したがって、ST文(TS文)におけるTの動作主性は{100% - ST文(TS

TABLE 1 刺激文のタイプ

	助詞	正 答	意 味	文 型	例	文
S と T	ST文	N ₁ 正答	中 立 A = 正答 I = 正答	(1) AsArV	Geobug i mulgogi neun mileotta.	(亀ガ 魚ハ 押した)
				(2) AsIrV	Ge ga yeonpil eun manjyeotta.	(犬ガ 鉛筆ハ 触った)
				(3) IsArV	Sangja ga ge neun mileotta.	(箱ガ 犬ハ 押した)
	TS文	N ₂ 正答	中 立 A = 正答 I = 正答	(4) ArAsV	Ge neun nagta ga mileotta.	(犬ハ らくだガ 押した)
				(5) ArIsV	Mal eun jiage ga muleotta.	(馬ハ ケンゴムガ 噛んだ)
				(6) IrAsV	Jiage neun geobug i tteryeotta.	(ケンゴムハ 亀ガ 叩いた)
S の み	S ϕ 文	N ₁ 正答	中 立 A = 正答 I = 正答	(7) AsA ϕ V	Ge ga mal mileotta.	(犬ガ 馬 押した)
				(8) AsI ϕ V	Mal i cleyong mileotta.	(馬ガ クレヨン 押した)
				(9) IsA ϕ V	Gong i mulgogi muleotta.	(ボールガ 魚 噛んだ)
	ϕ S文	N ₂ 正答	中 立 A = 正答 I = 正答	(10) A ϕ AsV	Nagta saseum i muleotta.	(らくだ 鹿ガ 噛んだ)
				(11) A ϕ IsV	Saseum sutkarag i muleotta.	(鹿 スプーンガ 噛んだ)
				(12) I ϕ AsV	Yeonpil saseum i muleotta.	(鉛筆 鹿ガ 噛んだ)
T の み	T ϕ 文	N ₁ 正答	中 立 A = 正答 I = 正答	(13) ArA ϕ V	Mal eun nagta manjyeotta.	(馬ハ らくだ 触った)
				(14) ArI ϕ V	Geobug eun sangja tteryeotta.	(亀ハ 箱 叩いた)
				(15) IrA ϕ V	Cleyong eun nagta muleotta.	(クレヨンハ らくだ 噛んだ)
	ϕ T文	N ₂ 正答	中 立 A = 正答 I = 正答	(16) A ϕ ArV	Geobug mulgogi neun manjyeotta.	(亀 魚ハ 触った)
				(17) A ϕ IrV	Saseum gong eun tteryeotta.	(鹿 ボールハ 叩いた)
				(18) I ϕ ArV	Sutkarag mulgogi neun mileotta.	(スプーン 魚ハ 押した)

N₁: 第1名詞, N₂: 第2名詞, A: 生物名詞, I: 無生物名詞, T: eun/neun, S: i/ga, ϕ は助詞を付けないことを示す。

TABLE 2 正答得点に関する分散分析表および検出力

要 因	SS	df	MS	F	Power (%)
年齢(A)	55.55	7	7.94	10.43***	10.7
誤差	54.78	72	0.76		
助詞(B)	18.53	2	9.26	28.74***	3.6
(A)×(B)	8.83	14	0.63	1.96*	1.7
誤差	46.42	144	0.32		
語順(C)	273.88	1	273.88	246.42***	52.6
(A)×(C)	86.77	7	12.40	11.15***	16.7
誤差	80.02	72	1.11		
(B)×(C)	21.02	2	10.51	42.46***	4.0
(A)×(B)×(C)	8.67	14	0.62	2.50**	1.7
誤差	35.64	144	0.25		
意味(D)	8.15	2	4.08	9.45***	1.6
(A)×(D)	8.83	14	0.63	1.46	1.7
誤差	62.12	144	0.43		
(B)×(D)	4.84	4	1.21	6.93***	0.9
(A)×(B)×(D)	6.44	28	0.23	1.32	1.2
誤差	50.28	288	0.17		
(C)×(D)	1.71	2	0.85	4.21*	0.3
(A)×(C)×(D)	2.41	14	0.17	0.85	0.5
誤差	29.21	144	0.20		
(B)×(C)×(D)	5.79	4	1.45	8.39***	1.1
(A)×(B)×(C)×(D)	9.15	28	0.33	1.89**	1.8
誤差	49.72	288	0.17		
合計	928.77	1439			

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

TABLE 3 主題助詞 -eun/neun(T) と主格助詞 -i/ga(S) の動作主性

年 齢	S>T	T>φ	S>φ	平 均
4 歳	58.3	58.3	71.7	62.8
5 歳	60.0	55.0	58.3	57.8
6 歳	65.0	51.7	69.2	61.9
8 歳	65.0	57.5	70.0	64.2
10 歳	60.8	64.2	79.2	68.1
12 歳	76.7	82.5	95.8	85.0
14 歳	68.3	80.8	90.8	80.0
大 人	75.8	79.2	90.8	81.9
平 均	66.3	66.1	78.2	70.2

S>T SとT両助詞を用いた文(ST文とTS文)におけるSの動作主性

T>φ Tのみ文(Tφ文とφT文)におけるTの動作主性

S>φ Sのみ文(Sφ文とφS文)におけるSの動作主性

文)の正答率}により算出することができる。生物・無生物の意味の要因については、第1名詞・第2名詞とも生物名詞である「正答中立型」(意味の要因は動作主選択にたいして中立)と、生物名詞にS(Tφ文とφT文ではT)が付き無生物名詞にSの付かない「正答=生物型」(正答の名詞は生物名詞)と、無生物名詞にS(Tφ文とφT文で

はT)が付き生物名詞にSの付かない「正答=無生物型」(正答の名詞は無生物名詞)の3水準に分けた(TABLE 1参照)。ST文とTS文においては動作主の選択において主格助詞によるか主題助詞によるかの競合・対立が正答率によって示されるように、「正答=無生物型」の正答とは生物・無生物という意味の手がかりによらず、それと対立・競合した主格助詞(Tφ文とφT文では主題助詞)によって動作主が判断されたことを示している。

分散分析 正答数に基づいて、年齢(8水準)×助詞の種類(3水準)×語順(2水準)×意味(3水準)の分散分析を行った。分析の結果、ならびに誤差項目を除いた全項目の中に占める各要因および交互作用の平方和の割合(検出力: power)を示したのがTABLE 2である。

年齢 年齢と正答率: 年齢の主効果が有意であったのは、TABLE 3の各行の平均値から明らかなように、各被験者群の正答率の全体の平均に差のあることを示している。すなわち各群の平均正答率(70.2%)を境として、4~10歳群よりも12歳~大学生群の方が正答率が高い。

助詞の種類 助詞の種類と正答率: TABLE 3の列の各平均に示すように、Tのみの文(Tφ文とφT文)においてTの付いた名詞を動作主として選択した率(Tφ文とφT文の正答率の平均)と、TとSの両助詞を用いた文(TS文とST文)においてSの付いた名詞を選択した率(TS文とST文の正答率の平均)が66%でほぼ同率であるのに対して、Sのみの文(Sφ文とφS文)においてSの付いた名詞を選択した率(Sφ文とφS文の正答率の平均)は78.2%であり、助詞の主効果が有意であったのはこの差の反映である。年齢の要因を除外すれば、1文中に主格のみが用いられた文(Sの動作主性: 78.2%)と主題のみが用いられた文(Tの動作主性: 66.1%)を比較しても、また1文中に主格と主題の両方が用いられる文(Sの動作主性: 66.3%, Tの動作主性: 43.7%)においても、主格の動作主性の方が主題のそれよりも高いことがわかる。**年齢×助詞の種類**: TABLE 3から明らかなように、TとSの両助詞を用いた文、Tのみの文、Sのみの文の各文型で、4~10歳群の正答率に比べて12歳~大学生群のそれの方が高い。すなわち、TとSの両助詞を用いた文では4~10歳群の平均正答率が61.8%であるのに対して12歳~大学生群では73.6%、Tのみの文では4~10歳の平均正答率が57.3%であるのに対して12歳~大学生群では80.8%、Sのみの文では4~10歳群の平均正答率が69.7%であるのに対して12歳~大学生群では92.5%であった。

語順 語順と正答率: TABLE 4に示すように、 N_1 にS(ただしTのみの文ではT)の付いた文、すなわち N_1 が正答になっている文型(Sφ文, Tφ文, ST文)におい

TABLE 4 第1名詞と第2名詞の動作主選択率

年 齢	第1名詞 =動作主 (A)	第2名詞 =動作主 (B)	平 均	(A)―(B)
4 歳	97.8	27.8	62.8	70.0
5 歳	89.4	26.1	57.8	63.3
6 歳	92.2	31.7	61.9	60.6
8 歳	97.8	30.6	64.2	67.2
10 歳	92.8	43.3	68.1	49.4
12 歳	91.7	78.3	85.0	13.3
14 歳	85.6	74.4	80.0	11.1
大 人	88.9	75.0	81.9	13.9
平 均	92.0	48.4	70.2	43.6

て N_1 を動作主として選択した率は92.0%であるのに対して、 N_2 に S (ただしTのみの文ではT) の付いた文、すなわち N_2 が正答になっている文型 (ϕ S文, ϕ T文, T S文) において N_2 を動作主として選択した率は48.4%であった。語順に対する検出力 power もTABLE 2に示すように52.6%と非常に大きく、語順の要因は正答率に最も大きな影響を与えているとすることができよう。年齢×語順: TABLE 4に示すように、 N_1 に S (ただしTのみの文ではT) の付いた文、すなわち N_1 が正答の文型において N_1 を動作主として選択した率は年齢による群間差がほとんどなく85.6~97.8%であるのに対して、 N_2 に S (ただしTのみの文ではT) の付いた文、すなわち N_2 が正答の文型において N_2 を動作主として選択した率は4~8歳群では26.1~31.7%, 10歳群では全体の平均値(48.4%)に近い43.3%, 12歳~大学生群では74.4~78.3%であった。このことから助詞の種類との交互作用を除外すれば、第1名詞に S (Tのみの文ではT) の付いた文型では年齢によらず第1名詞を動作主とする傾向が大であるのに対して、第2名詞に S (Tのみの文ではT) の付いた文型では正答が年齢とともに増加し、12歳の頃、大人の水準に達するという特徴のあることが確かめられた。助詞の種類×語順: 正答率の各文型における全体的平均はS T文83.1%, T S文49.4%, T ϕ 文96.5%, ϕ T文35.8%, S ϕ 文96.5%, ϕ S文60.0%であった。したがって、S ϕ 文とT ϕ 文で最も高く、S T文, ϕ S文, T S文と続き、 ϕ T文において最も低くなっている。助詞のある名詞が文頭にきたとき(S ϕ 文, T ϕ 文)の方が第2名詞に助詞が付く場合(ϕ S文, ϕ T文)よりも正答率が高いこと、1文中にSとTの両助詞を用いた文では、Sが第1名詞に付く場合(S T文)の方が第2名詞に付く場合(T S文)よりも正答率が高いことが示された。しかし、年齢との交互作用をさらに見る必要がある。

年齢×助詞の種類×語順: FIG. 1は6文型の正答率

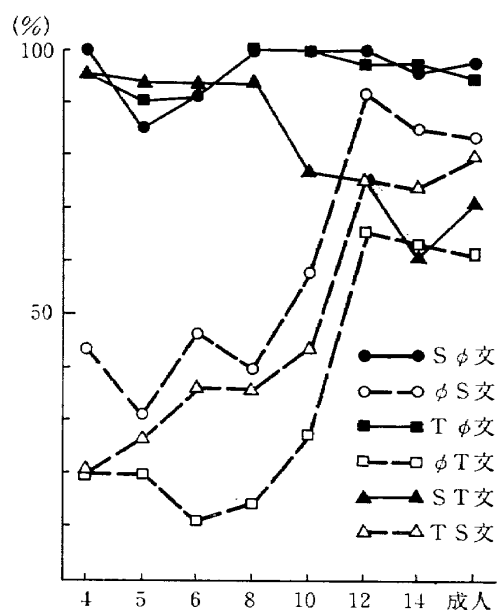


FIG. 1 各年齢における各文型の正答率

を各年齢ごとにグラフにあらわしたものである。S ϕ 文と ϕ S文と比較すると、S ϕ 文では全群で正答率が高く群間差が大きく認められないのに対して、 ϕ S文では4~10歳群の正答率が低く(31.7~58.3%), 語順に関係なくいつもSの付いた名詞を動作主とするのは12歳以降であるといえよう。T ϕ 文と ϕ T文の正答率の年齢変化と比較すると、T ϕ 文では全群で正答率が高く群間差が少ない。これに対して ϕ T文では低年齢群、すなわち4~10歳群での正答率の低さ(11.7~28.3%)が顕著で、むしろ助詞のない第1名詞を選択する傾向があるといえよう。しかし、12歳~大学生群での正答率も61.7~66.7%までしか増加せず、大学生でも第2名詞にTの付いた文においてTの動作主性は第1名詞にTの付いた場合よりも低い。さらに、T S文とS T文についての同様の比較をすると、T S文は4~10歳群では正答率が50%以下、すなわちSよりもTの動作主性の方が高いが、12歳~大学生群では正答率が75~80%に増大し、Sの動作主性の方が高くなる。一方、S T文では4歳群ですでに96.7%の正答率に達しており、Sの動作主性は年齢につれて、むしろ減少する傾向にある。しかし、S T文では全群、Sの動作主性の方がTのそれより高く、14歳群の61.7%を除外してSの動作主性は71.7%以上である。第1名詞が正答となる3文型(S T文, T ϕ 文, S ϕ 文)を各文について比較すると、FIG. 1から明らかなように年齢的变化に伴う正答率は単調増加とならず正答率も高い。これに対して第2名詞が正答となる3つの文型(T S文, ϕ T文, ϕ S文)は正答が年齢とともに増加し、12歳の頃ほぼ大学生の正答率に達するという特徴があることが認め

られる。しかし、この3要因の交互作用が有意になったのは、T ϕ 文と ϕ T文の場合に高年齢であっても2語順間の正答率の差がかなり大きいということに帰せられる。すなわち、12歳～大学生群までのS ϕ 文と ϕ S文の正答率の差は8.3～15.0%であり、ST文とTS文の正答率の差は0.0～13.3%と小さいのに対して、T ϕ 文と ϕ T文との正答率の差は31.6～35.0%と大きい。

意味 意味と正答率：意味の水準ごとに正答率の全体的平均をみると、正答中立型では69.0%，正答＝生物型では75.3%，正答＝無生物型では66.4%であった。したがって、動作主の選択に名詞の意味の要因が関与し、動作主の選択に対する意味の要因は生物名詞にS（ただしTのみの文ではT）の付いた正答＝生物型の文が最も強く、1文中の両名詞が生物名詞で意味の要因が動作主選択に対して中立の正答中立型の文がこれに続き、意味と助詞の手がかりが対立する正答＝無生物型の文、すなわち無生物名詞にS（Tのみの文ではT）の付いた文が最も弱いことが認められる。しかし、意味の主効果の power は1.6%と主効果の power の中で最も小さく、意味の要因が動作主判断に与える影響は小さい。

助詞の種類×意味：意味要因への依存の程度を明らかにするために、本論文では伊藤（1982）、Ito (in press) に従い、意味方略使用率（PUMS）を導入した。PUMS は【A I 型の文で第1名詞を動作主として選択した率(%)】－【I A 型の文で第1名詞を動作主として選択した率(%)】で算出される値である。もし被験者が助詞の種類、位置とは無関係に生物名詞を動作主として常に選択すれば PUMS は100%，もし常に無生物名詞を動作主として選択すれば－100%，もし生物・無生物といった意味的手がかりに全く依存せず動作主を決定すれば0%となる。助詞の種類の3水準について PUMS を算出すると、Sのみの文で10.0%，Tのみの文で14.4%，SとTの両助詞を用いる文で2.5%であった。したがって、意味の要因は主題のみの文で最も強く影響し、主格のみの文がこれにつづき、1文中に主格と主題の両方が用いられる文では動作主決定に意味の要因がほとんど影響していないといえるが、語順との交互作用をみる必要がある。**語順×意味：**語順の2水準について PUMS を計算すると、N₁が正答の文型（S ϕ 文、T ϕ 文、ST文）で7.9%，N₂が正答の文型（ ϕ S文、 ϕ T文、TS文）で10.0%であり、N₂が正答である文型の方が若干高い。しかし、この傾向はすべての助詞の種類についてあてはまらず、助詞の種類との交互作用をさらに検討する必要がある。**助詞の種類×語順×意味：**助詞の種類×語順の6水準について PUMS を算出すると、TABLE 5 の行の各

TABLE 5 各年齢群の各文型における意味方略使用率（PUMS）(%)

	4	5	6	8	10	12	14	大人	平均
ST文	-10	5	20	-5	10	-10	25	50	10.6
TS文	5	25	15	-25	-15	-30	-25	5	-5.6
T ϕ 文	5	15	25	0	0	5	5	10	8.1
S ϕ 文	0	5	20	0	0	0	10	5	5.0
ϕ T文	5	15	25	10	10	20	40	40	20.6
ϕ S文	15	10	35	5	25	5	15	10	15.0
平均	3.3	12.5	23.3	-2.5	5.0	-1.6	11.7	20.0	9.0

T: -eun/neun S: -i/ga

平均に示すように、PUMS 値の最も大きいものでも ϕ T文の20.6%，つづいて ϕ S文の15.0%であった。したがって、動作主の決定に生物名詞の要因が若干作用するが、全体としてはほとんど意味に依存していないこと、若干ながらも意味に依存する文型は第2名詞にのみ助詞の付く ϕ S文と ϕ T文の2文型であることが確認される。**年齢×助詞の種類×語順×意味：**この4要因の交互作用はTABLE 5の各年齢群における各文型のPUMSによって示される。全体的にみてPUMSの値が特に高いのは、大学生群のST文の場合と、14歳と大学生群の ϕ T文である。4～10歳群はPUMSの値が6歳群を除いて0%に近く6文型間の差がないのに対して、12歳群以上になると文型によるPUMSの値の差が大きい。また、TS文型においては8～14歳群でPUMSが負の値をとる、すなわち無生物名詞が動作主として、より選択されるという結果となった。

助詞・語順・意味の3つの手がかりの競合 以上で述べた結果は18文型をすべて分散分析に基づいてまとめたものである。それに対して、ここでは本研究で定義した正答という分析方法を用いず、TとSの各々について助詞、語順、意味の3つの手がかりの競合関係（Bates et al, 1984）に着目して、ある手がかりが他の2つの手がかりと競合する文型についてのみとりあげる。まず、助詞の手がかりが語順（文頭の名詞）と意味の手がかりと対立しているのは「A ϕ ITV 文型」及び「A ϕ ISV 文型」（TABLE 1の文型17と11）である。これらの文型では、助詞の手がかりに基づけば助詞の付いた第2名詞（N₂）が選択され、語順と意味の手がかりに基づけば第1名詞（N₁）が選択される。意味の手がかりが他の2つの手がかりと対立するのは「IS A ϕ V 文型」及び「IT A ϕ V 文型」（文型15と9）であり、意味の手がかりに基づけば生物である第2名詞を選択するが、他の2つの手がかりに基づけば第1名詞を選択する。同様に「I ϕ ASV 文型」と「I ϕ ATV 文型」（文型18と12）は、語順の手がかり（第1

TABLE 6 手掛かりの競合する文型での単一手掛かりの使用率(%)

助詞 手掛かり	主題(-eun/neun)			主格(-i/ga)			主題 合計	主格 合計	平均
	助詞	意味	語順	助詞	意味	語順			
文型	17	15	18	11	9	12			
4歳児	20	5	75	45	0	40	100	85	93
5歳児	10	15	75	25	15	65	100	105	103
6歳児	0	25	75	35	20	30	100	85	93
8歳児	10	0	80	45	0	50	90	95	93
10歳児	20	0	70	50	0	25	90	75	83
12歳児	55	5	25	95	0	0	85	95	90
14歳児	50	5	10	85	10	0	65	95	80
大人	40	10	20	85	5	5	70	95	83
平均	26	8	54	58	6	27	88	91	89

名詞)が意味と助詞(第2名詞)に対立している。TABLE 6は、以上の6文型において他の2つの手がかりと対立している手がかりについて、各々の動作主としての選択率を示したものである。したがって、文型11と17のみが正答率と一致し、他の4文型は100%から正答率を引いた値となる。Tの入った文型について全体をみると、最も多く使用された手がかりは語順、次に助詞であり、意味の手がかりの使用は少なかった。一方、Sの入った文について全体をみると、最も多く使用されたのは助詞の手がかり、次に語順であり、意味の手がかりの使用は最も少なかった。TとSを比較すると、Sの入った文の方が助詞による動作主判断が多く、語順による判断が少ないことが明かである。各年齢群でみると、年齢が上がるにつれて助詞の手がかりによる動作主選択が増加するのに対して、語順の手がかりの要因は減少する。意味の手がかりは、いずれの年齢においても少なかった。以上の結果は全体の分散分析の結果と一致している。

考 察

韓国語成人における主題と主格の標識: TABLE 3に示すように、韓国語成人話者における主題助詞 -eun/neun (T) と主格助詞 -i/ga (S) の動作主性は、1文中にSのみの文(Sの文とSの文の平均: 90.8%)とTのみの文(Tの文とTの文の平均: 79.2%)を比較するとSの方、またTとSの両方が用いられる文でのTとSの動作主性(Sの動作主性はST文とTS文の平均で75.8%, Tの動作主性は24.2%)でもSの方が高くなっている。主題助詞または主格助詞が単独であられる文でも、また1文中に両助詞が出現する文でも、主格助詞の動作主性が主題助詞のそれより高いことが明かである。さらに、主題助詞のみの文では主題助詞の動作主性が高いことから、

主格標識(i/ga)の無い単文では主題にあたる名詞句が動作主として知覚されやすい傾向が示された。韓国語の -eun/neun は主題提示の特殊助詞であり(洪, 1983), 文法的には格関係を表わす機能を備えてはいない。しかし, 実際の言語運用では他動詞文の動作主にあたる名詞句は主題化されることが多いことから, -eun/neun が文法上はともかく, 言語使用経験に基づいた経験的・心理的な機能として聞き手に動作主であると解釈される力があることの結果として, -eun/neun の動作主性が高くなったのだと解釈される。-i/ga は主格の格助詞であるので, 本実験で用いたような他動詞文では動作主性が高かったのは当然である。-eun/neun より -i/ga の動作主性が高かったことは韓国人成人話者が両者の機能を識別していることを示している。

主題助詞と主格助詞の動作主性の発達: FIG. 1 を見れば, いわゆる正語順(N₁が正答)の文型(Sの文, Tの文, ST文)では3文型いずれも4歳児で大人の正答率の水準(あるいはそれ以上)に達しているのに対して, 逆語順(N₂が正答)の文型(の文, の文, TS文)では3文型いずれも大人の正答率の水準に達するのは12歳以降であった。このことは, 本研究でいう語順の要因, すなわち助詞の位置の要因が韓国語の文理解にとってきわめて重要な影響を与え, その影響は10歳にまで及ぶことを示している。Slobin & Bever (1982) は, 子どもは最初その言語に特有な形式(規準的語順図式 canonical sentence schema)を獲得するとしている。韓国語の他動詞文において, これは「動作主+被動作主+動詞」という語順に相当する。韓国語の日常の言語使用では, 動作主が主題または主語として文頭にくる場合が圧倒的に多いと考えられる(ただし省略文を除く)。このような規準的語順以外の語順においても助詞の機能にしたがって動作主の判断ができるようになるのは12歳以降であり, 極めて主題助詞 -eun/neun と主格助詞 -i/ga の獲得の時期は遅いといえる。Hakuta (1982) は, 日本語の能動文・受動文の獲得において助詞(が, を, =)と語順の間に相互作用があり, N₁+がを一貫して動作主とみなす時期がある(3歳頃と思われる)ことを指摘している。本研究での韓国語幼児においても N₁+i/ga を一貫して動作主とみなしており, Hakuta (1982) の研究と言語の違いを超えた共通性が見られた。

つぎに, 主題助詞と主格助詞を比較すると, 同じ非規準的な語順(の文との文)であっても, どの年齢群においても主格助詞の動作主性の方が主題助詞の動作主性より(11.7~35.0%)高い。先に10歳までは助詞選択における語順の影響の大きいことを先に述べたが, の文と

φS 文の比較においてはすでに 4 歳児においても主格助詞と主題助詞の動作主性を弁別している。すなわち、文頭でなくても主格助詞の方が主題助詞よりも動作主として選択されやすいという傾向は 4 歳～大人まで一貫して見られた。この意味では主題助詞と主格助詞の動作主性の違いに対する感受性 (sensitivity) は、すでに 4 歳で獲得されているといえよう。12 歳～大学生群についていえば、FIG. 1 の S の正語順と逆語順の語順による差は小さい (8.3～15.0%) のに対して、T のその差は (31.6～35.0%) と大きい。これは高年齢の韓国語話者において、他動詞文の動作主の決定に S が絶対的な強さを持つのに対して、T の場合には他の要因に対して相対的な強さしかないからであると考えられる。

意味方略と語順方略：名詞の意味の手がかりによる動作主選択を Hayashibe (1975) に従い意味方略と名付け、語順に基づいて文頭の名詞を動作主とする方略を語順方略と、また、助詞に基づく動作主選択を助詞方略と呼ぶ。すでに述べたように、助詞方略の使用が多いのは 12 歳以降であるのに対して、助詞方略以外の方略が多用されるのは 10 歳までの低年齢群である。この 10 歳群以前では、TABLE 6 にもみられたように、語順方略が多用される。助詞以外の方略を見ると、韓国語母語話者は全体的に意味方略を用いることは少なく、語順方略が用いられる。助詞の手がかりに基づいた文処理ができない場合、子どもはデタラメな判断をするというのではなく、語順方略に基づいた一貫した反応があるのではないかと考えられる。それは、TABLE 6 に見られたように、意味方略の使用が全年齢群で低く、助詞方略が年齢が上がるにつれて増加するのに対して、語順方略は助詞方略と相補うようにして年齢とともに減少し、また、少なくとも 10 歳群までは意味方略に対して語順方略の割合が高いためである。さらに、T の入っている文の方が S の入っている文よりも語順方略の使用が高いことも、T の場合には助詞による動作主選択の手がかりが得られにくかったことの反映だと考えられる。

日・韓両言語における主題と主格の標識の比較：

(1)成人における主題と主格の標識 伊藤 (1982), Ito (in press), 伊藤・田原 (1986) は、日本人成人母語話者において、第 1 に、1 文中に主格助詞ガのみが用いられた文と主題助詞ハのみが用いられた文での各々の動作主性は、ハとガが両方ある文でのガの動作主性よりも高い、第 2 に、1 文中にハまたはガが単独であられる文の場合でも、また両助詞が出現している文の場合でも、ガの動作主性はハのそれよりも高い、しかし第 3 に、1 文中にハのみしか用いられない文ではハの動作主性が高いと

いう 3 点を明らかにした。この傾向は、韓国人成人母語話者における主題助詞 -eun/neun, 主格助詞 -i/ga の使い分けと一致している。日・韓両言語において、日本語のガ・韓国語の -i/ga は主格の格助詞であるのに対して、ハ・-eun/neun は格関係を示す働きを持たない主題提示の助詞であるという文法上の共通性を持つのみならず、主題と主格の標識の使い分けといった言語運用の上でも、日・韓の成人母語話者は同様の使い分けの傾向を持っているといえることができる。このことは、両言語の文法上・言語運用上の共通性を強く示唆している。韓国の学校文法では、-eun/neun を補助詞、-i/ga を主格助詞としているが、日・韓両言語の共通性を前提とすると、我々がすでに用いたように、-eun/neun を主題、-i/ga を主格とする分類の方が有効であろう。日本語の国文法教育でも、ハとガを主語というあいまいな概念でひとまとめに教えるのではなく、主題のハ、主格のガという区別された用語を用いて整理して教えるべきであろう。

(2)主題助詞と主格助詞の動作主性の発達 日本語母語話者に対して本研究と同一の実験方法で実験を行っている伊藤・田原 (1986) によれば、いわゆる正語順 (N_1 が正答) の文型 (ガφ文, ハφ文, ガハ文) では 4 歳で大人の動作主性の水準 (あるいはそれ以上) に達しているのに対して、逆語順 (N_2 が正答) の文型 (φガ文, φハ文, ハガ文) で大人と同じ水準になるのは 10～12 歳頃であった。本研究において、韓国語母語話者は正語順の文型では 4 歳児で大人の水準に達しているのに対して、逆語順の文型では 12 歳頃であった。したがって、日・韓両言語において語順の影響を受けずに助詞による動作主の選択ができるようになる時期はほぼ同時期であり、両言語とも主題助詞と主格助詞の獲得は極めて遅いといえることができる。ここにも、日・韓両言語で共通性が見られる。

日・韓両言語において主題と主格の獲得が遅れる第 1 の要因として、両言語とも、主題と主格の標識が様々な機能を併せ持っていることが考えられる。すなわち、主題の助詞は題目を提示するだけでなく、対照 (久野, 1973), 旧情報 (田原・伊藤, 1985) などの機能を併せ持ち、主格の助詞は述部に対して主格という格関係を明示するだけでなく、総記 (排他) (Kuno, 1973), 新情報 (田原・伊藤, 1985) などの機能を併せ持っている。したがって、主題・主格の標識の表層形式と機能が 1 対 1 対応していないために獲得が遅れると考えられる。獲得の遅れる第 2 の要因として、日・韓両言語とも主題と主格の標識が省略可能であるということがあげられよう。すなわち、助詞は必ず用いなくてはいけないという標識 (obligatory

marker)ではないために、動作主決定などの際、文法的手がかりとして相対的な強さに欠け、意味や語順等の他の手がかりが最初利用され(Hayashibe, 1975; 岩立, 1980), 獲得の時期が遅れるのだと考えられる。

(3)助詞方略, 意味方略, 語順方略 成人では、韓国人においては格標識に基づく助詞方略が最も強く、次に強いのが語順方略であり、名詞が生物か無生物かといった名詞の意味による意味方略は最も弱かった。伊藤・田原(1986)によれば、日本語においては成人の場合、格標識による助詞方略が最も強く、意味方略がこれに続き、語順方略が最も弱かった。日・韓両言語において、助詞方略が格関係の決定に最も強い役割を果たすのは、両言語の語順が比較的自由であり、格助詞が格関係の決定に主要な役割を占めているという文法的特質によるものであろう。この意味では両言語の話者の単文処理の様式は非常に似ているといえる。しかし、助詞という文法的手がかりを獲得していない年齢において、韓国語では、意味の要因よりも語順に頼るのに対して、日本語では語順よりも意味に頼る。このような差異がなぜ生まれたかの説明は、今後の課題である。

本研究の結果は、日・韓両言語は言語構造が似ているだけでなく、言語運用においても共通性があることを示唆するものである。韓国人成人母語話者においては、主題と主格の助詞の動作主の選択の様式が日本人成人母語話者と共通のパターンであった。発達のみると、主題助詞と主格助詞を語順に左右されず動作主選択の手がかりとして正しく理解できる時期は12歳であり日本語の助詞ハとガの獲得の時期と似て遅く、両言語とも、主題助詞と主格助詞の真の意味での獲得が遅いということが示された。助詞の手がかりが得られないとき、日本語児では語順よりも意味を手がかりとして用いたのに対して、韓国語児では意味よりも語順の影響が大きかった。また、日・韓両言語の文法教育・第2言語教育において、主題の概念ではなく主題と主格という概念を使うことの有効性が強く示唆された。

引用文献

- Bates, E., MacWhinney, B., Caselli, C., Devescovi, A., Natale, F., & Venz, V. 1984 A cross-linguistic study of the development of sentence interpretation strategies. *Child Development*, 55, 341-354.
- Hakuta, K. 1982 Interaction between particles and word order in the comprehension and production of simple sentences in Japanese children. *Developmental Psychology*, 18, 62-76.
- 秦野悦子 1979 子どもにおける“は”“が”の獲得の研究 教育心理学研究, 27, 160-168.
- Hayashibe, H. 1975 Word order and particles: a developmental study in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics*, (ICU), 8, 1-18.
- 林部英雄 1983 文における新・旧情報の弁別に関する発達的研究 心理学研究, 54, 135-138.
- 洪思満(Hong, Sa-man) 1983 国語特殊助詞論 学文社(韓国語)
- 伊藤武彦 1982 日本語の「は」と「が」の動作主性: 日本人, 二言語併用者, アメリカ人日本語教師/学習者の比較 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 24-25.
- Ito, T. in press. Universal and particular in sentence processing strategies in monolinguals, bilinguals, and second language learners: a cross-linguistic study of Japanese and English, To be published in E. Bates and B. MacWhinney (Eds.), *Crosslinguistic studies of language processing*. Cambridge University Press.
- 伊藤武彦・田原俊司 1986 ハとガの動作主性の発達 パン F. C.・八代京子・秋山高二(編)ことばの多様性, 87-106. 文化評論出版
- 岩立志津夫 1980 日本語児における語順・格ストラテジーについて 心理学研究, 51, 233-240.
- 岩立志津夫 1986 個人差・個人内差・課題差研究(1): 助詞獲得と課題差 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 102-103.
- 近藤一政 1978 助詞ガとハの使い分けの発達 東京大学教育心理学科卒業論文(未公開)
- 久野暲 1973 日本文法研究 大修館書店
- Kuno, S. 1973 *The Structure of the Japanese language*. Cambridge MA: The MIT Press.
- Li, C.N., & Thompson, S.A. 1976 Subject and topic: a new typology of language. In C. N. Li (Ed.) *Subject and topic*. Academic Press.
- Miyazaki, M. 1979 The Acquisition of the particles *wa* and *ga* in Japanese: a comparative study of L1 acquisition and L2 acquisition. Unpublished Master's thesis. University of Southern California. (Unpublished)
- Slobin, D., & Bever, T. 1982 Children use canonical sentence schemas: A crosslinguistic study of word order and inflections. *Cognition*, 12,

229-265.

鈴木忍 1978 文法 I 助詞の諸問題 1 国際交流基金
凡人社

田原俊司・伊藤武彦 1985 助詞ハとガの談話機能の発
達 心理学研究, 56, 208-214.

付 記

本研究の一部は、第三著者の昭和61年度文部省科学研

究費（個人奨励研究）の援助に基づいておこなわれた。
本実験の遂行にあたり、実験に協力して下さった富川専
門大学付属幼稚園、ソウル明水台国民学校、漢陽大学付
属中学校、明逸女子中学校、漢陽大学の関係者の方々と
漢陽大学 李秀遠教授に心より感謝します。また、論文
作成にあたり東京大学芝祐順教授の御助言をいただきま
した。

（1986年11月16日受稿）